

4 主要農作物病害虫の発生状況と原因解析（平成24年速報）

1) 普通作物

(1) 水稲

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
苗立枯病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	少ない発生であった。	床土消毒や育苗管理が適正に行われたため、全般には少なかった。
葉いもち	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	少ない発生であった。	6月中旬以降高温で経過し、発生に不適な条件だった。早植・普通植ともに発生は少なかった。
穂いもち	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	少ない発生であった。	葉いもちの発生が少なく、8月の気温が高く降水量も少なかったため、発生に不適な条件だった。
紋枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：やや少	8月以降に発生が見られ、平年並みだった。	7月、8月は高温で経過したが、降水量が平年より少なかったため、平年並の発生だった。
ばか苗病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：やや少	育苗箱での発生が一部で見られたが、少ない発生だった。	
稲こうじ病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：やや少	平年よりやや少ない発生だった。	穂ばらみ期の7月中下旬が高温で経過したため、発生に不適な条件だった。
縞葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：やや多	県南部を中心に発生ほ場が多くみられ、一部で要防除水準を超えるほ場も見られた。一方、これまで発生が少なかった県中北部にも、程度は軽いが拡大している。	4年前から県南部で発生が増加し、一部でヒメトビウンカの保毒虫率が高い地域が見られる。8月上旬本田でのヒメトビウンカの発生量もやや多かった。
黄萎病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－		
ヒメトビウンカ	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：多 前年：並	本田の飛込み時期はやや遅い傾向。5月から9月までの予察灯調査期間中の総誘殺数はやや少ない。8月上旬の本田におけるすくい取り調査では、発生程度は多。	7～8月の気温が高く推移したため、発生には好適な条件であった。
ツマグロヨコバイ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	5月から9月までの予察灯調査期間中の総誘殺数はやや少ない。8月上旬の本田におけるすくい取り調査では、発生量は平年並。	7～8月の気温が高く推移したため、発生には好適な条件であった。
セジロウンカ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：やや多	5月から9月までの予察灯調査期間中の総誘殺数はやや少ない。8月上旬の本田におけるすくい取り調査の発生量は平年並。	本県への飛来はやや少なかった。
トビイロウンカ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	予察灯における誘殺数は少ない。	本県への飛来は少なかった。
ニカメイガ	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	フェロモントラップによる越冬世代成虫の発生量はやや少ない。7月中旬の心枯茎の発生株率はやや少なく、8月下旬から9月上旬の白穂の発病率率は県中を中心にやや多い。	越冬幼虫の発生程度はやや少なかったが、7～8月の気温が高く推移したため、発生には好適な条件であった。
コブノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：並	予察灯における誘殺数はやや少ない。	本県への飛来は少なかった。
イネミズゾウムシ	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	5月から9月までの予察灯調査期間中の総誘殺数はやや少ない。	越冬世代成虫の越冬密度が低かったため、発生量はやや少なかった。
イネツトムシ(イチモンジセセリ)	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：やや少	7月上旬の発生程度は平年並、7月下旬、8月上旬はやや少なかった。	7月下旬に気温が低く、発生にやや不適な条件であった。適切な箱施用剤の使用により発生が抑制された。
イナゴ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	8月上旬の本田におけるすくい取り調査では、発生程度は平年並であった。	
斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ)	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：やや多 前年：やや少	7月中旬のイネ科牧草地での発生量は平年並。8月上旬の本田におけるすくい取り調査での発生量はやや多い。クモヘリカメムシは平年並、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメはやや多、ホソハリカメムシはやや少ない。	6月中下旬の気温が低く、クモヘリカメムシの越冬地からの飛来やカスミカメムシ類の発生は遅れたと考えられる。7～8月の気温は高く推移したため、その後の発生には好適な条件であった。

(2) 麦

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：やや多	県南の小麦ほ場の一部で発生が見られた。	
赤かび病	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：多	5月中旬調査では県全域で散見された。5月下旬調査では六条大麦・小麦の調査ほ場64ほのうち82.8%のほ場で発生が見られたが、程度は軽かった。	4月中旬の低温と下旬の高温により、大麦を中心に不稔粒が発生し、5月上旬の多雨により赤かび病の発生が助長された。しかし、5月中旬以降の高温と少雨によりその後の拡大は抑制された。
大麦縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	少ない発生であった。	二条大麦はⅢ型抵抗性品種に切り替わった。
小麦縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：やや少ない	本年の4月中旬調査では、調査ほ場392のうち13.3%のほ場で発生が見られた。また、県央部では程度の高いほ場が見られた。	前年、発生が多かった地域の一部で抵抗性品種や大麦への作付転換が行われたが、まだ対策が進んでいない地域では程度の高いほ場が見られる。
大麦斑葉病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	少ない発生であった。	健全な種子が供給された。

(3) 大豆

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
紫斑病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－		
べと病	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：やや多	8月中旬はやや少、9月上旬はやや多くなった。	8月中旬に降水量が多く、発生に好適な条件となった。
コガネムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：並	県北の予察灯では7月を中心としてオオクロコガネ誘殺数が多くなった。	堆肥を利用する飼料作物が多い地域では、成虫が大豆に飛び込む機会が多い。
アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：やや少	8月中旬は平年並、9月上旬はやや多かった。	7～8月の気温が高く推移したため、発生には好適な条件であった。
ダイズサヤタマバ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－		
シロイチモジマダラメイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－		
マメシンクイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－		
吸実性カメムシ類	平年：やや早 前年：やや早	平年：多 前年：多	フェロモントラップによるホソヘリカメムシの誘殺はやや早い傾向。水銀灯予察灯による誘殺数は、クサギカメムシは多く、アオクサカメムシは平年並、イチモンジカメムシはやや少。ほ場での吸実性カメムシ類の発生程度は8月中旬、9月上旬とも多い。	ほ場では主にホソヘリカメムシ、アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、プチヒゲカメムシ、クサギカメムシが観察された。7～9月の気温が高く推移したため、発生には好適な条件であった。
ハスモンヨトウ	平年：並 前年：やや遅	平年：多 前年：並	フェロモントラップによる成虫誘殺はやや早くやや多い傾向。大豆における幼虫の発生ほ場率は8月中旬は高く、9月上旬は平年並。幼虫頭数は9月上旬は若齢～中齢を中心に多く、発生程度は多。	8～9月の気温が高く推移したため、発生には好適な条件であったが、9月上旬に降水量が多く、発生がやや抑制された。
フタスジヒメハムシ	平年：やや早 前年：やや早	平年：並 前年：並	発生程度は、8月中旬は多、9月上旬は平年並であった。	8～9月の気温が高く推移したため、発生には好適な条件であったが、9月上旬に降水量が多く、発生がやや抑制された。

2) 野菜

(1) いちご(親株・育苗株：平成24年6～9月)

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
炭疽病	平年：やや早 前年：やや早	平年：並 前年：少	例年よりやや早い発生であったが、育苗期の発生は平年並であった。	昨年の発生が多かったことから、発生が早いほ場では親株の潜在感染によるものと考えられた。
萎黄病	平年：やや早 前年：やや早	平年：やや多 前年：やや多	7月に一部のほ場で発生が認められ、9月の調査では散見されるほ場が増え、やや多い発生となった。	前作の本ほ場で発生が見られた生産者において、発生が見られたことから、汚染土壌の混入によるものと考えられた。
灰色かび病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	7月にごく一部のほ場(親株)で発生が見られた。	適切な防除により発生が抑えられた。
うどんこ病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	6月の発生は平年並で、7月に入って発生が増加したが、その後は減少した。	6月の低温により7月の発生は多くなったが、7月以降は高温のため発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年：並	平年：並	親株、育苗期間を通して平年並の発生となった。	適切な防除により発生が抑えられた。
ハダニ類	平年：並	平年：やや多	親株はやや多く、7月以降は平年並み～やや多い発生であった。	夏季の気温が高く降水量も少なく、発生に好適な条件であった。薬剤感受性の低下も多発の一因と考えられた。
コナジラミ類	平年：並	平年：やや少	親株、育苗期間を通してやや少ない発生であった。	

(2) トマト (夏秋:平成24年6~9月)

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
疫病	平年:並 前年:並	平年:少 前年:少	全般に少ない発生であった。	6月の気温は平年よりも低く発生に好適であったが、7月、8月は高温、少雨であったため発生が抑えられた。
灰色かび病	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや少	6月はやや多い発生であったが、7月以降平年並の発生となった。	7月、8月が高温であったが、降水量が少なかったため発生が抑えられた。
葉かび病	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:並	生育初期は少なかったが、生育後半は一部のほ場でやや多い発生であった。	耐病性品種が中心に作付けされているが、一部耐病性品種で発生した。
モザイク病	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:並	全般に少ない発生であった。一部ほ場でトマトモザイクウイルス (ToMV) 新系統によるえそ症状発生株が散見された。	
黄化葉巻病	平年:並 前年:並	平年:少 前年:少	全般に少ない発生であった。	育苗期からコナジラミ類の適切な防除が行われた。
アブラムシ類	平年:並	平年:並	6月には多くみられたが、その後は少なく推移した。	
コナジラミ類	平年:並	平年:やや少	6月は平年並みの発生であったが、その後はやや少なく推移した。	
ハモグリバエ類	平年:並	平年:やや多	6~7月はやや多く、8月は平年並みの発生であった。	ハモグリバエを対象とした防除回数の減少、他の害虫発生が並~やや少なく防除圧が小さかったことなどが、前半にやや多かった要因と考えられた。

(3) なす

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
うどんこ病	平年:並 前年:やや早	平年:やや多 前年:やや多	全般にやや多い発生であった。	軟弱に生育したため6月から発生が見られ、その後もやや多い発生で推移した。
灰色かび病	平年:並 前年:並	平年:少 前年:並	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
半身萎凋病	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:やや多	7月に一部のほ場で見られた。	水田との輪作、抵抗性・耐病性台木が普及しているため発生は少なくなっている。
青枯病	平年:並 前年:並	平年:少 前年:少	一般的に少ない発生であった。	水田との輪作、抵抗性・耐病性台木が普及しているため発生は少なくなっている。
ハダニ類	平年:並	平年:やや多	一般的に多い~やや多い発生であった。	夏季の気温が高く降水量も少なく、発生に好適な条件であった。薬剤感受性の低下も多発の一因と考えられた。
アブラムシ類	平年:並	平年:やや多	一般的に平年並みの発生であったが、7月の発生は多かった。	夏季に高温少雨で推移したことが7月に発生が増加した一因と考えられる。その後は、適切な防除による平年並みの発生となった。
アザミウマ類	平年:並	平年:やや多	6月は平年並みの発生であったが、その後は多く推移した。	夏季の気温が高く降水量も少なく、発生に好適な条件であった。薬剤感受性の低下も多発の一因と考えられた。

(4) きゅうり (夏秋:平成24年6~9月)

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
灰色かび病	平年:並 前年:並	平年:少	一般的に少ない発生であった。	
べと病	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:やや少	一般的にやや少ない発生であった。	7月、8月は高温、少雨であったため発生が抑えられた。
うどんこ病	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:やや多	生育初期から発生が見られ、全般にやや多い発生であった。	6月の低温や一時的な多雨により発生が助長され、その後も多く推移した。
褐斑病	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:やや少	6月に一部のほ場で発生が目立ったが、7月以降やや少ない発生であった。	
疫病	平年:並 前年:並	平年:少 前年:少	一般的に少ない発生であった。	6月の気温は平年よりも低く発生に好適であったが、7月、8月は高温、少雨であったため発生が抑えられた。
ハモグリバエ類	平年:並	平年:やや少	6、7月は少ない発生であったが、9月にはやや少ない発生であった。	
アザミウマ類	平年:並	やや多	6月は多く、7月はやや多く、9月には平年並みの発生であった。	夏季の気温が高く降水量も少なく、発生に好適な条件であった。薬剤感受性の低下も多発の一因と考えられた。
アブラムシ類	平年:並	平年:やや多	6月は多く、7月は以降はやや多い発生であった。	高温少雨で発生に適した条件であったと考えられる。

(5) ねぎ

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
さび病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	一般的に少ない発生であった。	7月、8月は高温、少雨であったため発生が抑えられた。
べと病	平年：やや早 前年：早	平年：やや少 前年：やや少	7月はやや多い発生であったが、8月以降は少ない発生となった。	6月の低温により7月の発生は多くなったが、7月以降は高温のため発生が抑えられた。
黒斑病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	7月は少なかったが、8月以降増加し、9月には多い発生となった。	
萎縮病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	一般的に少ない発生であった。	
アブラムシ類	平年：並	平年：やや少	7月は少なかったが、8、9月は平年並みであった。	適切な防除により発生が抑えられた。
アザミウマ類	平年並	平年：やや多	7月は多かったが、8月はやや多く、9月には平年並みとなった。	生育期には寄生が多いものの、収穫前の適切な防除により被害は抑えられた。
ハモグリバエ類	平年並	平年：並	7、8月はやや多かったが、9月には少発生となった。	適切な防除により発生が抑えられた。
ネギコガ	平年並	平年：並	7月は多かったが、8月以降は減少した。	適切な防除により発生が抑えられた。

(6) たまねぎ

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
さび病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
べと病	平年：やや遅 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	4月までは少ない発生であったが、5月になって発生が多くなった。	
灰色かび病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
黒斑病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年：並	平年：やや多	一般的にやや多い発生であった。	
アザミウマ類	平年：並	平年：並	一般的に平年並みの発生であった。	

(7) 野菜共通(さといも、だいこん)

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
ハスモンヨトウ	平年：並	平年：並	フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の誘殺数は、ほぼ平年並みで推移した。	
オオタバコガ	平年：やや早	平年：並	フェロモントラップの誘殺開始は平年より早かったが、総じて平年並みの発生であった。	

3) 果樹

(1) なし

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
黒斑病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	一般的に少ない発生であった。	県内の主力品種は、耐病性のある幸水、豊水が作付けされている。
黒星病	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	発生時期は平年並で、発生量は5月が少なかったが、6月以降県内全域で多くなった。	開花後(5月上旬)の降水量が多く、日照時間が少なく発生に好適な条件となった。また、多雨により薬剤散布の効果が十分に得られなかったと考えられた。
赤星病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：少	5月の発生は少なかったが、6月～8月の発生はやや少～平年並で推移した。	産地のビャクシン類が少なく、飛散胞子量が少なかった。
アブラムシ類	平年：並	平年：並	一般的に平年並の発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
ハダニ類	平年：並	平年：並	6月以降増加し、8月には多い発生となった。	高温少雨であったことに加え、薬剤感受性の低下、多発したカメムシ防除による天敵減少などの複合要因と考えられた。
ハマキムシ類幼虫	平年：並	平年：やや少	一般的に少ない発生であったが、7月に一部のほ場で発生が見られた。	適切な防除により発生が抑えられた。

(2) ぶどう

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
晚腐病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	一般的に少ない発生であった。	7月、8月が高温であったが、降水量が少なかったため発生が抑えられた。
べと病	平年：早 前年：やや早	平年：多 前年：やや多	例年より早い時期から発生が見られ、全般に多い発生となった。	6月の低温や一時的な多雨により発生が助長され、その後も多く推移した。
黒とう病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：多	6月から発生が認められ、一部の品種で発生が目立った。	近年、発生増加傾向があり、茎や枝での越冬が多く、全般にやや多い発生になった。
ハマキムシ類	平年：並	平年：少	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
アザミウマ類	平年：並	平年：少	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。

(3) りんご

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
斑点落葉病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
赤星病	平年：並 前年：並	平年：少	一般的に少ない発生であった。	産地のビャクシン類が少なく、飛散胞子量が少なかった。
褐斑病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	7月までの発生は少なかったが、8月になってやや多い発生となった。	7月下旬の気温が平年よりも低く、降水量が多かったため増加した。
輪紋病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	一般的に少ない発生であった。	
ハダニ類	平年：並	平年：並	一般的に平年並の発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年：並	平年：やや少	5月は平年並み、6月はやや多い発生であったが、その後は少なく推移した。	適切な防除により発生が抑えられた。
ハマキムシ類幼虫	平年：並	平年：少	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。

(4) 果樹共通

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
カメムシ類	平年：早	平年：多	フェロモントラップによる誘殺数は、チャバネアオカメムシ、クサギカメムシともに多で推移した。果樹カメムシ類の果樹への飛来は、うめ、ももなどで5月ごろからはじまり、その後も多く推移した。フェロモントラップおよび水銀灯への誘殺数は調査期間を通じて多かった。	越冬世代発生量、第一世代発生量ともに多かったと考えられる。今年のスギヤヒノキの球果収量は少なく、山林からの飛び出しは早くなったと考えられる。
ナシヒメシクイ	平年：並	平年：並	フェロモントラップへの誘殺数は平年並みで推移した。一部のは場で被害がみられたが、適切な防除が行われた。	
モモシクイガ	平年：並	平年：やや多	7月から8月にかけてフェロモントラップへの誘殺が認められ、平年よりやや多かった。	
リンゴコカクモンハマキ	平年：やや遅	平年：並	6月にフェロモントラップへの誘殺が認められたが、一般的に平年並みの発生であった。	

4) 花き

(1) きく

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
白さび病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	7月の発生は多かったが、全体的に少ない発生であった。	6月の低温により7月の発生は多くなったが、7月以降は高温のため発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年：並	平年：並	5月は平年並み、6月はやや多く、7月は再び平年並みの発生となったが、8月に入って増加し多発生となった。9月には防除が徹底されたためか、少発生であった。	夏季に高温で発生に好適な条件であった。彼岸など出荷前防除により、抑えられた。
アザミウマ類	平年：並	平年：やや多	5月はやや多く、6～7月は多かったが、その後8月は減少して平年並み、9月に入って再びやや多くなった。	昨年から引き続き多い発生が続いている。薬剤抵抗性の発達も懸念される。
ハダニ類	平年：並	平年：多	5～6月および9月は多く、7～8月はやや多い発生であった。昨年から引き続き発生が多い。	夏季に高温で発生に好適な条件であった。また、常にハウス内で苗～収穫期まで連続して栽培されているため、発生も連続した。薬剤抵抗性の発達も懸念される。